〔段注說文解字五上竹〕簋、飯敧也、敧各本作敧、支部敧持去也、危部敧隘也、敧者傾側意、箸必傾側用之、故曰飯敧、宗廟宥座之器、曰敧器、古亦當作敧器也、箸曲禮謂之梜、假借爲箸落爲箸明、古無去入之別、字亦不从艸也、从竹者聲、陟慮切、又遲倨切、五部、

○按ズルニ、說文ニ箸アリテ著ナシ、故ニ匕箸ノ箸モ著明ノ著モ並ニ竹ニ從フ、

〔本草綱目三十八服器〕筯ハシ拾遺

釋名、箸、時珍曰、古箸以竹、故字從竹、近人兼用諸木及象牙爲之矣、

〔事物紀原八什物器用〕箸

禮記曰、飯黍無以箸、韓子曰、紂爲象箸、觀之明箸前有商紂、始以象爲之耳、

〔類聚名義抄八竹〕筯箸或正、長慮反、筴、ハシ、上又助箸二音、下音除、

〔伊呂波字類抄波雜物〕箸ハシ、亦作筯、　扶提　鋷

〔運歩色葉集葉〕筯ハシ

〔東雅十一器用〕箸ハシ　倭名抄に、筯はハシ、字又作箸、唐韻に、筯は匙箸也といふ、匙カヒ、兼名苑に匕一名は匙といひ、說文に、匕は所以取飯也と云ふと註したり、箸をハシといふは觜也、其食を取る事の、鳥觜の如くなるをいふなり、又ハシとは端也、古には細く削れる竹の中を折屈めて、其端と端とをむかひ合せて、食を取りしかば、かく名づけしなり、猶弓の弰、箭の筈をハズといふが如しといふ也、カヒとは古語に物の柄を呼びてカヒといふ、匕匙飯匙の如き幷にカヒといふも其義也、古の時に、箸竹幾株など云ひしは、今の如く二筋をもて、一前などいひし如くにはあらず、細く削り成したる一筋を、中より屈めて、その兩端を對して、食を取りたるなり、萬葉集に見えし弟の挽歌に、父母が成しのまに〳〵箸向ふともよみ、又今も諺に、箸折り屈めし兄弟なりなど云ふ事のあるは、古の遺言にして、其本一つなるものゝ相向ひぬるをいふなり、

〔倭訓栞前編二十四波〕はし　箸も食する橋なるべし、よて御箸の渡るといふ辭あり、新撰字鏡に筴もよめり、今も大嘗會の箸、古へ尙方の箸も、竹を用ゐたる事、內膳式、姓氏錄に見えたり、中世も親王大臣にあらざれば、白箸を用ゐずといへり、箸臺といふあり、後世漆箸だにあるに、文正の比の